

仏像光背の変遷とその表現形式について

——焰肩の図像表現を中心に——

内 藤 善 之

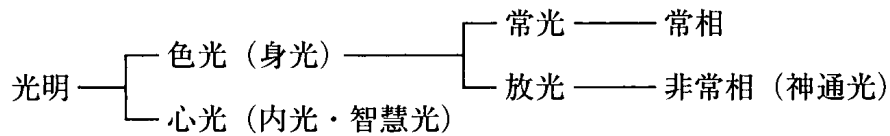
はじめに

光背を端的に説明すると「仏身から放たれる後光を造形化したもの。」¹⁾と定義される。仏像造像起源であるインド以来、仏教の変遷に伴って光背は仏の超越性を強調するため、重要な地位を占めるようになる²⁾。

近年、熊谷氏による光背と神変の関係についての論考がある³⁾。氏は神変の根源的な相は光明であることを述べ、光背が神変の表現媒体の一つであることを説示する。本論は氏の論説に倣い、光背の初期変遷過程として改めて焰肩を取り上げ、従来光背とに分けて考えられてきた焰肩に対して言及をおこなうものである。

光明表現と光背

光背の起源をここで簡略ながら言及するとイラン発祥とされるアフラ・マズダーやミトラ神の影響が考えられ、光明、光輝といった太陽神等の一表現としての可能性が示唆される。グレコ・バクトリア時代アイ・ハヌム出土のキュベレ女神像円板（前 2 世紀頃）にヘーリオス神とされる頭光に光線が放射状に拡散する表現を刻む例等がみられる。またクシャーン朝のコインの裏面に刻印された太陽神ミトラは、頭光として円盤の周囲に鋸歯文を施し荘厳される⁴⁾。光背の根源となる光明を仏教ではどう捉えていたのだろうか。石田氏、川崎氏、熊谷氏は、諸経論の記述を参照し光明の性質を分類化している⁵⁾。その中で、熊谷氏は仏身から発せられる光明相を常時放たれる光明と神通力を用いた時の非常時の光明と分けて説示し、「神通力による放光という特殊な状況も仏教美術の題材として看過すべきではない。」とも述べている⁶⁾。石田氏と熊谷氏の説明をまとめ図示すると次の通りである⁷⁾。



仏像の初期光背

ガンダーラ

ガンダーラ，すなわち現在のペシャワールを中心とするインダス河，その支流カブール河流域一帯から出土した初期仏像の殆どは無装飾の円板形の頭光光背の形をとる．時代が降って加飾する場合は光背の円周に沿って輻状文，蓮弁，波状文，月桂樹の葉などの装飾を巡らす遺例が確認される⁸⁾．ガンダーラではカニシカ王のコインに二重円光で囲まれた仏がみえるもの，石彫では単純な円板形が通例であった．

マトゥラー

一方マトゥラーの仏像は頭光の周囲に半輻文や菩提樹の葉の文様が装飾される．周縁に連弧文を刻むカトラー出土仏坐像以降は，例外なくこのタイプの光背が用いられる．時代が降り頭光全面を華麗な文様で埋め尽くすようになって，外周を連弧文で飾るのがマトゥラー仏の顕著な特徴である⁹⁾．グプタ時代には花列文，唐草文，連珠文，華綱などを同心円状に配する光背が出現する．また現存遺例に関する限りインド本土の地の光背には火焰のモチーフを確認することは困難である¹⁰⁾．

焰肩表現と光背について

アフガニスタン地域に代表されるインド・イラン混成文化圏において仏像はガンダーラと比較的共通する装飾パターンを示すが，インドの地では見られなかった様式もしばしば出現する．通例ガンダーラの燃燈仏は単純な円板型の光背を付ける¹¹⁾．これに対し，カーピシー出土の燃燈仏は肩から火焰を発し，光背の縁に鋸歯紋や火焰文を用いて，表現豊かに火焰の燃え盛る様相を示す¹²⁾．このような図像表現はこの地独自の様式であり，火焰が仏像光背の装飾表現で使用されることはインドの他の地域では確認出来得ない¹³⁾．同一の主題を基とした図像表現にこのような顕著な相違が浮かび上がる以上，それは地域乃至，時代の様式差に起因するものとして考察する必要がある¹⁴⁾．焰肩の図像は双神変（舎衛城の神変），及び燃燈仏授記の二種の説話を基として表現される¹⁵⁾．両肩，足元か

(202)

仏像光背の変遷とその表現形式について (内 藤)

ら火焰、水流を発する2種の記述を参照すると両者とも「火」及び「光」に関係した説話であることが注目されよう¹⁶⁾。双神変の異相はその発露となる火焰を性質上光明表現の一部として考えるならば、この地において光明と火焰は一種、同様な表現として扱われたのではないだろうか。

この火焰、光明を伴う神変相の一表現である焰肩の淵源をインドでは見出せないことから、イラン及びゾロアスター教の影響である可能性が、かねてから示唆されている¹⁷⁾。焰肩の図像はヴィマ・カドフィセース王の金貨に刻印された王像の右肩に火焰が立ち上る様が表現され、カニシカ王以降定着したモチーフとなる。いずれにせよこの地でインドでは重要視されなかった火焰に対する崇拝が行われ、その表現を示す火焰装飾が発展していったと考えられる。カーピシー起源の仏像と同様の表現である焰肩は中央アジアの壁画にみられる。

結語

燃燈仏 Dīpaṃkara や羅什が訳出した焰肩の原語である *arci-skandha* の訳語には訳出者によって種々あるが焰、光の2種を適用するのが一般的である。このような訳経僧の訳出例から両者は非常に近似した性質であるという認識が仏教側になされていたと類推されよう。神変として顕れる焰肩が光明の一形態と考えるならば円形である初期光背とは形状を異にするが、同様の放光表現の一つと捉えることは必ずしも不当ではなかろう。熊谷氏は「仏尊の放つ光明中に焰肩や化仏などを配した「光背」が「神変」の表現を担う。」と指摘する¹⁸⁾。仏身より放たれる光明が神変の根源的相の一つと捉えるならば、双神変等を表す焰肩の図像もこの範囲に含まれ、焰肩も光背表現の一種として包括されとの見解が示される。光も火焰も大気現象の一つであり、その親和性は高い。その中で焰肩は両者の融和の契機となった図像表現ではなかろうか。インド本土の地では火焰ではなく蓮華等の植物文様が光背の装飾に用いられた。蓮華は「誕生」や「生成」にかかわる象徴的意義が付与されていた。またその宗教的意味の解釈は諸学者達によって「超越性」をその象徴の重要な意義とすることで概ね共通しており、火焰とは異なる方法で仏の超越性をあらわしている¹⁹⁾。今まで指摘したように少なくともインドの地では光背に火焰が確認出来なかった以上は何かしらの思想的理由が存在すると類推され、別に詳しく検討の必要があろう。多様な文化圏が交じり合う地域で焰肩という特異な表現形式の萌芽をみた。光背の性質が多様に変容するという観点に立脚するならば、中央アジア乃至西域諸地域の文化圏は従来あらわされて

きた円形光背から脱し形状の異化を促す起点となった地域といえるのではないだろうか。

- 1) 久野健編『仏像事典』東京堂出版, 1975.
- 2) 伊藤義教『ゾロアスター研究』岩波書店, 1979, pp.361-409.
- 3) 熊谷貴史「神変と光背に関する一考察」『密教図像』29, 2010, pp.58-72.
- 4) 小川英雄「ミトラス教起源論の諸問題」『オリエント』33 (1), 1990, pp.1-14.
- 5) 石田茂作「仏像光背の種類と變遷」『考古学雑誌』1940, pp.1-32. 川崎信定他「(シンポジウム) 光明とは何か—思惟と実践の接点を求めて—」『豊山教学大会紀要』7, 1979, p.21. 註 (3) 熊谷貴史, 前掲書, p.65.
- 6) 註 (3) 熊谷貴史, 前掲書, p.65.
- 7) 註 (3) 熊谷貴史, 前掲書, p.65. 註 (5) 石田茂作, 前掲書, p.2.
- 8) 高田修『仏像の起源』岩波書店, 1967, p.247.
- 9) 註 (8) 高田修, 前掲書, pp.367-390, figs. 116, 131.
- 10) 田辺勝美「迦畢試国出土の仏教彫刻の制作年代について」『オリエント』15 (2), 日本オリエント学会, 1972, pp.87-121.
- 11) 安田治樹「ガンダーラの燃燈仏授記本生図」『仏教芸術』157, 1984, pp.66-78.
- 12) 高田修「焰肩仏と双神変像」『仏教芸術』117, pp.45-46. 土谷遥子「アフガニスタン・カピサ地方ハム・ザルガル仏教寺院址出土の帝釈窟說法図」『上智大学外国語学部紀要』20, 1985, p.228.
- 13) 宮治昭「舍衛城の神変」『東海仏教』16, 1973, pp.7-8.
- 14) モタメディ遥子「アフガニスタン出土の燃燈仏本生譚の諸遺例」『仏教芸術』117, 1978, pp.20-40. 井上陽「カーピシー出土仏像にみられる焰肩の意味」『密教図像』18, 1999, pp.1-14.
- 15) 村上東俊「燃燈仏に見られる焰肩と『六度集経』について」『印度學佛教學研究』60-2, 2011, pp.83-86.
- 16) 「舍衛城の神変」や「燃燈仏授記」に関する経典については赤沼智善「燃燈仏の研究」『仏教研究』6-3, 1924. 註 (13) 宮治昭, 前掲書, pp.1-27. Alfred Foucher, "The Great Miracle at Sravasti," in *The Beginnings of Buddhist Art and Other Essays in Indian and Central-Asian Archaeology*, translated by L. A. Thomas and F. W. Thomas (Paris: P. Geuthner; London: H. Milford, 1917), pp.47-84. を参照.
- 17) 田辺勝美「カニシュカー一世金貨の国王立像考—焰肩の起源と意義—」『仏教芸術』156, pp.51-63, 1984.
- 18) 註 (3) 熊谷貴史, 前掲書, p.69.
- 19) 安田治樹「ガンダーラ仏と蓮華座」『法華文化研究』31, 2005, pp.1-23.

〈キーワード〉 光背, 焰肩

(立正大学法華經文化研究所研究員)